日常場面における実質ほめと形式ほめの関係の検討

○関龍馬¹・小林剛史²

(¹ 文京学院大学大学院人間学研究科・² 文京学院大学人間学部)

キーワード: 実質ほめ, 形式ほめ, 日常場面

A study on relationship between praise and flattery in everyday situations

Ryuma Seki¹・Takefumi Kobayashi²

(¹ Graduate School of Human Studies, Bunkyo Gakuin University・² Department of Human Studies, Bunkyo Gakuin University)

Key words: praise, flattery, everyday situations

目 的

Felson & Zielinski (1989) は子どもを対象に「ほめ」が感情に及ぼす効果を検討し、子どもはほめられる頻度が高いほど自尊感情が高くなることを報告している。また、Anderson, Manoogian & Reznick (1976) は子どもを対象に「ほめ」が動機づけに及ぼす効果を検討し、金銭などの物質的報酬を与えられた子どもに比べて「ほめ」のような社会的報酬を与えられた子どもは、後の行動の動機づけが高くなることを明らかにしている。このように、従来の研究は子どもを対象に「ほめ」が感情や動機づけに及ぼす効果（ほめの効果）を明らかにすることを目的としてきた。しかし、「ほめ」には純粋に相手に対するポジティブな評価の伝達を行おうとする「実質ほめ（賛辞）」と、ほめの効果に重点を置きその効果を期待して行う「形式ほめ（世辞）」の少なくとも2種類があるとされ、これまでの研究では、ほめられる側が「ほめ」を賛辞として認知する場合と世辞として認知する場合とで、同様のほめの効果が得られるか、あるいは異なるほめの効果が得られるのかは明らかにされていない。

そこで本研究では、青年に3日間、日記を携帯させるという方法を取り、日常場面において「ほめ」をどのように認知しているか、そしてその認知が感情に及ぼす効果について検討することを目的とした。

方 法

【研究対象者】大学生6名（平均年齢20.17, SD=0.98, 女性6名）を研究対象者とした。

【研究手法】日常場面で用いられている「ほめ」を調査するための記録法として Wheeler & Nezlek (1977) が考案した、日常場面での様々な他者との相互的なやりとり（社会的相互作用）を詳細に記述するための、“Rochester Interaction Record (RIR)”を用いた。RIRとは、調査対象者が日記をつけていき、実験者が日記の中に記載された社会的相互作用の質と量を分析していく方法である。

【課題】研究対象者は3日間、日記を常に携帯し、自分と他者との社会的相互作用の内容、およびその社会的相互作用の中で自分がほめた場合のほめの内容、他者からほめられた場合の内容について主に記入した。

【日記】日記には清書用の日記（A4版）と、その縮小版である携帯用の日記（A7版）の2種類があり、研究対象者はA7版を常に携帯し、適宜、清書用の日記に転記した。具体的には、社会的相互作用について記入する部分（日付、開始時間、終了時間、相互作用相手の名前、性別、相手との関係、相互作用の状況）、自分がほめたことについて記入する部分（ほめた内容、ほめた意図・理由、ほめの中の賛辞・世辞評定、ほめる前の快-不快感情評定、ほめた後の快-不快感情評定）、他者からほめられたことについて記入する部分（ほめられた内容、ほめの認知、ほめの中の賛辞・世辞評定、ほめられる前の快-不快感情評定、ほめられた後の快-不快感情評定）の3

つの部分から成っていた。

【手続き】研究対象者には、日記の記入の仕方についての教示を行った後、改めて参加の意志を確認した。記録の開始後のリタイアも可能であることを伝え、教示用冊子、日記（清書用A4版、携帯用A7版）を渡した。研究対象者には1日目の夜にメールにて質問を受け付けた。4日目に清書用の日記（A4版）を回収した。

結 果

対象者自身がほめた場合のほめる前・後の快-不快感情得点平均、ほめられた場合のほめられた前・後の快-不快感情得点平均、ほめ認知ごとのほめられる前・後の快-不快感情得点平均の結果を表1に示す。全ての平均値について感情の変化を検討するためにt検定（対応あり）を行ったところ、対象者自身が他者をほめた場合においては、ほめる前に比べてほめた後の方が有意に感情得点が快方向に変化した ($t(23)=3.41, p<.01$)。一方対象者が他者にほめられた場合は、ほめられる前に比べてほめられた後の方が感情得点が有意に快方向に変化した ($t(24)=3.22, p<.01$)。次に、対象者が他者にほめられた場合にこれを賛辞と認知した場合は、ほめられる前に比べてほめられた後の方が感情得点が有意に快方向に変化した ($t(11)=2.35, p<.05$)。対象者が他者にほめられた場合にこれを世辞と認知した場合は、ほめられる前とほめられた後の感情に有意な変化は見られなかった ($t(7)=0.89, n.s.$)。

表1 「ほめ」に対する快-不快感情得点の平均(SD)

	前	後
ほめた場合	2.63(0.58)	2.17(0.70)**
ほめられた場合	2.76(0.44)	2.12(0.93)**
ほめられた場合に賛辞と認知した場合	2.66(0.49)	2.00(0.85)*
ほめられた場合に世辞と認知した場合	2.86(0.35)	2.50(1.07)

※ * $p<.05$, ** $p<.01$

考 察

本研究では、「ほめ」が感情に及ぼす効果について、特に対象者がこれを賛辞として認知した場合と世辞として認知した場合の条件の相違に注目して検討を行った。まず、研究対象者自身がほめた場合もほめられた場合も、ともに感情に及ぼす有意な効果が見いだされた。すなわち本研究では、ほめられることが感情を快方向に変化させるという結果が得られ、ほめられる頻度が高いと自尊感情が高くなるというFelson(1989)の知見と、「ほめ」が感情に快の効果と一致していた。さらに、対象者が他者によるほめを賛辞と認知した場合、感情得点が有意に快の方向へと変化した。これに対し対象者が他者によるほめを世辞と認知した場合は、感情得点の有意な変容は見られなかった。このことは、人がほめを賛辞と受け取るか世辞と受け取るかで感情の快方向への変化に相違が見られることを示唆するが、現時点での対象者数は依然として少なく、さらにデータを蓄積した上で再検討する必要がある。